



農家の棚田は、農家の人材不足により荒廃が進んでいる。

しかし現状において、棚田の景観ばかりが重要視され、本来そこで営まれている人たちの生活は軽視されている様に思う。

棚田での生活をもっと豊かにするためのものならば、文化的景観である棚田の中にも建築は建ちうるのではないか。





序

モダニズムより前の様式建築において、建築はそれを象徴する立面（正面）を持ち、建築前方の主要な道路や広場からの見え方はとりわけ重要となる傾向が見られた。しかしモダニズム期において、建築の正面性は消失した。それは表現として、ある面を他の面と差異化するよりも、面と面の連続性を重視したためであり、それによって立面すべてが同じような見え方をする、正面を持たない建築が生まれた。しかし現代において、建築の見え方は形態とともに多様化していると言える。また、建築の見え方は観者の立っている場所（視点場）と密接な関係にある。とりわけ山岳地帯では、その豊かな地形条件によって特殊な視点場が存在しており、それによって発生する建築の見え方も特殊であると言える。

山岳地帯特有の視点場の位置付

山岳地帯特有の視点場の特徴として多様であることが挙げられる。多様とは対象と観者の位置関係が多様に存在していることを指しており、見上げ、アイレベル、見下ろしがそれに当たる。そして多くの場合、これらは連続的な変化の中に位置づけられる。



分類

上記に着目し、ここ 10 年間の新建築より抽出した 38 事例を対象とし建築の見え方の分析を行った。その結果山岳地帯特有の視点場に対して、見え方が変化する建築、または不変である建築の 2 種類に分類することができた。また建築の見え方の変化、不変は素材、形体、模様によって引き起こされるという結果も得られた。以下においてそれら 6 種類（変化、不変 × 素材、形体、模様）の分類を行い、それぞれ代表例を示しその特徴を記す。

	素材	形体	模様
変化	砂利 → 木材	薄い屋根 → 細い柱	円 → 縦ライン
	二期倶楽部（渡辺明設計）	なおしま海の駅（SANAA 設計）	富弘美術館（ヨコミソゾマコト設計）
不変	アルミ	曲面	縦スリット
	浦葉市文化センター（C+A 設計）	slowture 三木（遠藤秀平設計）	備中風土記念館（丹波設計事務所設計）

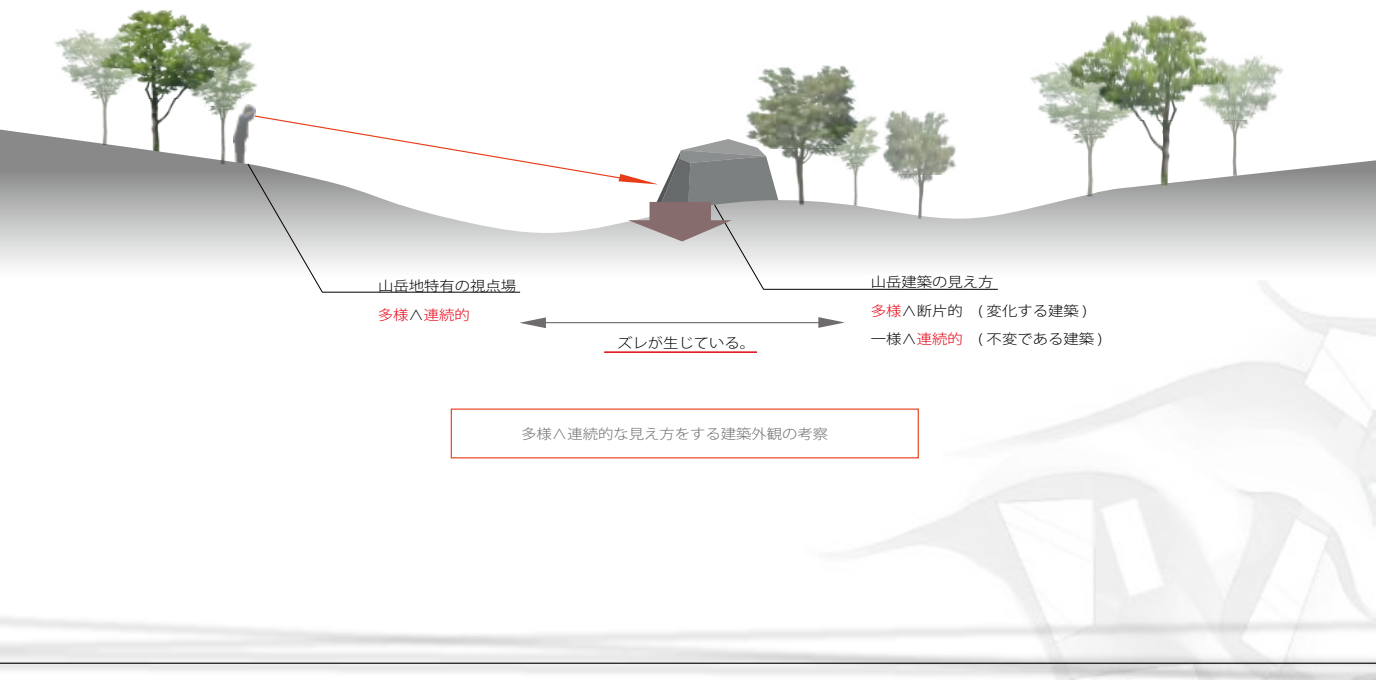
小結

山岳地帯特有の視点場における建築の見え方を、変化する建築と不変である建築に分類し、それを引き起こす要素が素材、形体、模様であることを明らかにした。以上で得られた知見をもとに、長野県千曲市城捨において展示兼休憩施設の設計を行う。



- i: 二期倶楽部
- ii: なおしま海の駅
- iii: 富弘美術館
- iv: 浦葉市文化センター
- v: slowture 三木
- vi: 奥備中風土記念館

概念図



部分構成

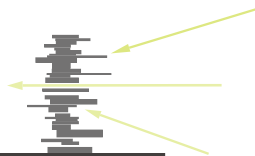
concept において行った「集合体による構成」の分析を、建築の部分構成において取り入れる。本敷地は土地の起伏により上下の変化が主であるため、垂直方向に対して集合したもの、スラブを積層したものによって多様な連続的な視覚的变化を引き起こす操作を行う。



壁を配置する。



水平板の集合により壁を形成し、連続性を生む。



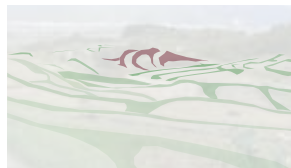
前後にずらすことで発生する奥行き感が、それぞれの視点場における見え方に多様性を生む。



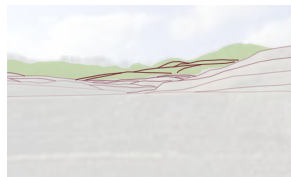
奥行き感をもった壁が連続し、空間にも変化を生む。

全体構成

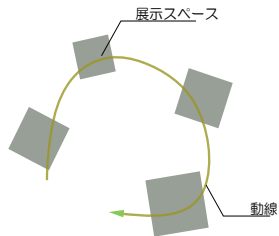
対象の周辺には、見下ろし、見上げという特殊な視点場が存在しており、それらから得られる要素を基に建築本体の形体を構成する。それぞれの視点場の風景から視覚的な特徴を抽出し取り込むことで、建築の見え方をより多様なものになる。



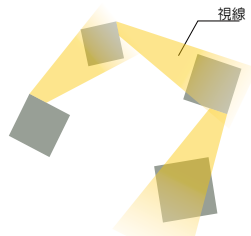
見下ろしの視点場…傾斜上方の駐車場からのアクセス時において発生する視点場。棚田の段による模様が抽出できる。それらを建築本体の平面形状において取り込む。



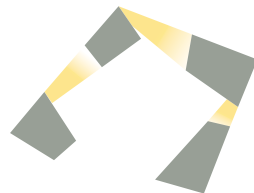
見上げの視点場…傾斜下方に広がる田んぼからによる視点場。棚田の段差が水平方向に歪みながら伸び、その背景には山並みによるスカイラインが抽出できる。それらを建築の立面形において取り込む。



内部空間である展示スペースを分散配置することで、利用者は外部空間を介しながら展示空間を回遊する。

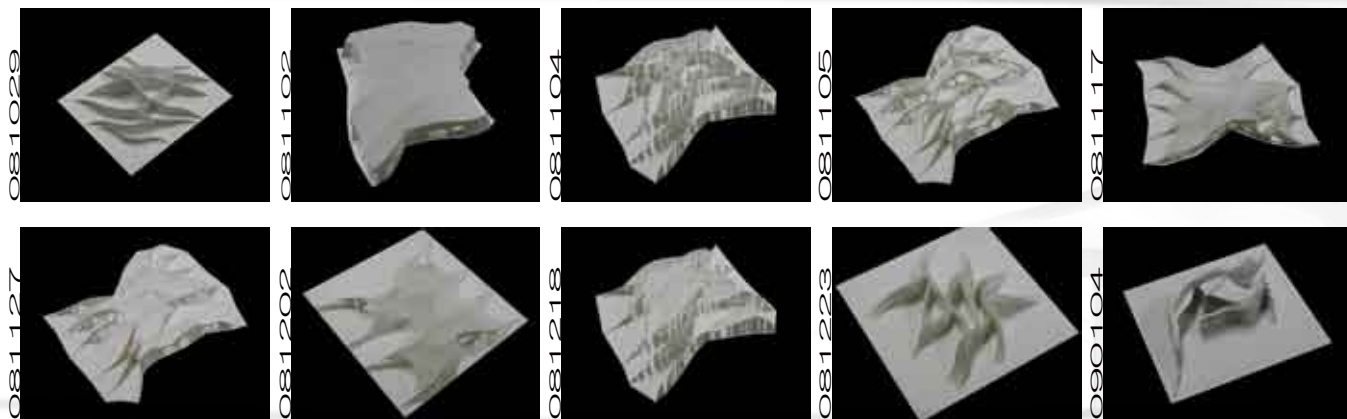


移動の際に発生する視線を限定し、次の展示空間を視界に入れるよう配置することで、空間的には断絶しつつも視覚的な連続感が得られる。



ひとつ前の空間からの視線によって展示空間の平面形を決定することで抜けを強調し、より視覚的な連続感を強調する。

study



対象敷地：長野県千曲市姨捨

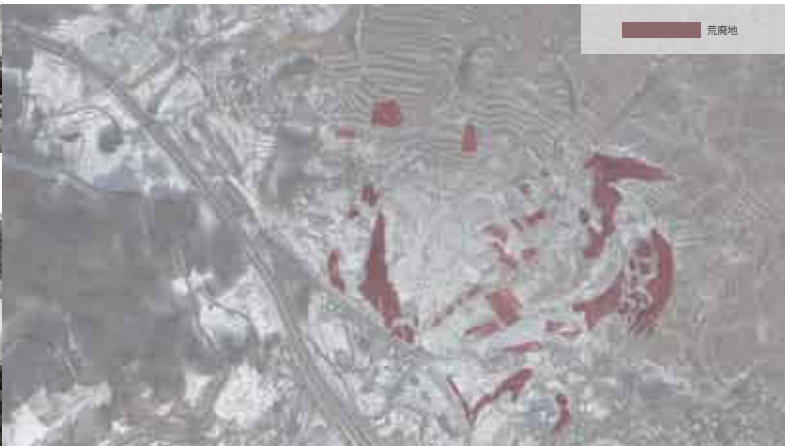
用途地域：無指定

建ぺい率：60%

容積率：200%

現在姨捨の棚田は、「田毎の月」として有名であり、日本棚田百選にも選出されている。また長野県千曲市の景観保全地区として指定されているものの、用途地域は無指定となっている。そのため現状田んぼの中に一軒家がぽつりと建っている状態もしばしば見られるなど、棚田の景観に合わない建築物や設備、鉄塔などが点在しているのも一つの問題である。

また、現存している棚田の内訳は右図のとおりである。現在全体の約8割は様々な形で利用されているものの、2割弱は荒廃地として未整備のままの状態になっている。そこで本設計では、開発が進んだ地区と棚田の境界部分に位置する、現在荒廃した敷地を対象とし、計画を進める。





wide area

姨捨駅

JR 篠ノ井線

長野自動車道

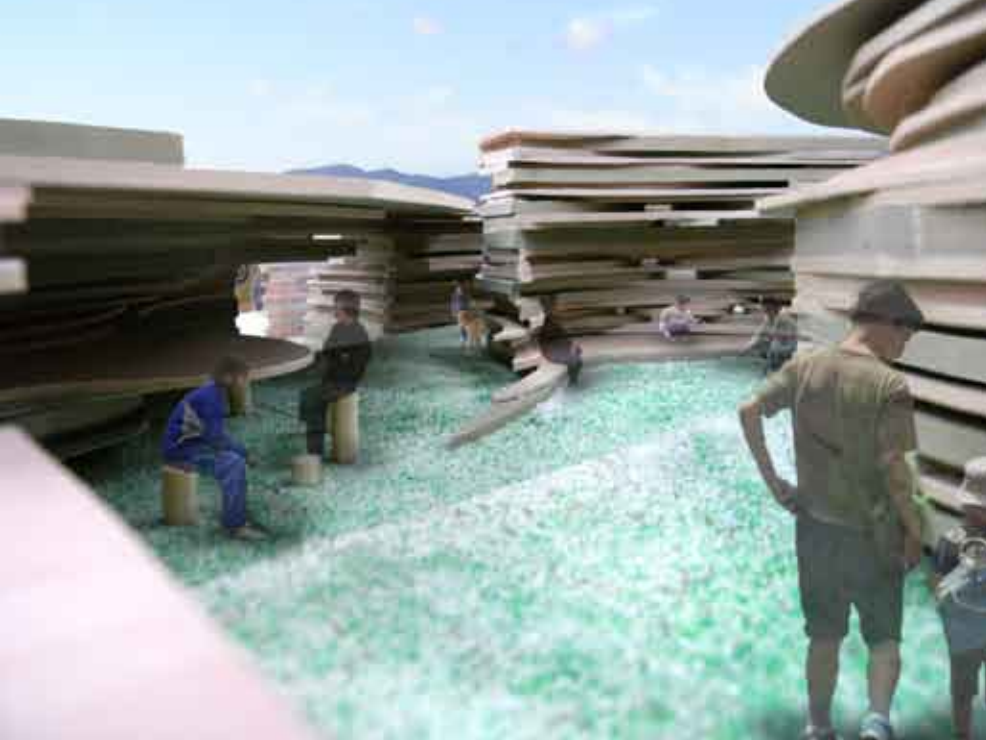
site







企画展示スペースを見る。
棚田の段が内部にも取り込まれており、立体的な構成になっている。壁面は積層されたスラブが、外部とは違う表情をなしており、ところどころ空いた隙間からは光が洩れる。



休憩スペースを見る。
積層されたスラブが、机や椅子となり、空間を作り上げている。そこにできた空間は、農業の合間に休憩することのできる憩いの場となる。

